



公益財団法人 広島平和文化センター
Hiroshima Peace Culture Foundation

〒730-0811 広島市中区中島町1番2号
TEL (082) 241-5246 (代表) FAX (082) 542-7941 E-mail:p-soumu@pcf.city.hiroshima.jp
平成25年(2013年)12月/年3回発行 [URL]http://www.pcf.city.hiroshima.jp/hpcf/

第八回平和市長会議総会を開催

平和首長会議(旧名称・平和市長会議)は、八月三日(土)から八月六日(火)、四年に一度の総会を広島市で開催しました。

第八回となる今回は、『核兵器のない世界』の実現を目指して『ヒロシマ・ナガサキの心』を世界に「を基調テーマに、国内外の百五十七都市と十一か国の政府、NGO等十八団体から、三百五人が参加し、二〇二〇年までの核兵器廃絶に向けた具体的

な取組について議論しました。

開会式

最初に、松井一實広島市長が主催者を代表して挨拶を行いました。松井市長は、今回の総会の基調テーマについて「二人でも多くの被爆者が存命のうちに核兵器廃絶を成し遂げなければならぬ」という決意を込めた」と述べ、核兵器禁止条約の早期実現を目指したさらなる取組の強化へ協力を呼び掛けました。

その後、来賓代表として湯崎英彦広島県知事が挨拶を述べ、最後に、潘基文国連事務総長とロシア都市連合会長のメッセージが紹介されました。

被爆体験証言

被爆体験証言者の松島圭次郎さんが、英語による被爆体験証言を行いました。松島さんは、被爆当時の悲惨な様子について語り、「世界中どここの国でも二度と同じ過ちを繰り返してはならない。広島で学んだことを、皆さんの国に帰って伝えて

第8回平和市長会議総会開会式で挨拶する松井市長

下さい。」と訴えました。

会議 I

松井市長の進行により、役員都市の選任、二〇一三年から二〇一七年までの行動計画など五つの議案について審議がなされ、全て原案通り決定されました。

会議 II

小溝泰義本財団理事長のコーディネートにより、「2020ビジョンキヤンペーン」の今後の取組」をテーマに、二〇二〇年までの核兵器廃絶を目指す、これまでの活動の報告と今後の取組についての議論が行われました。

会議では、2020ビジョンキヤンペーン協会、国内加盟都市、2020ビジョンキヤンペーターと、「広島・長崎講座」を実施しているベルリン工科大学から、活動の紹介や、キヤンペーンの将来の展望についての提案がありました。

会議 III

ノルウェー・フロン市のトローレ・ベツビィ市長のコーディネートにより、「平和市長会議の地域のグループ化と市民と連携した取組の推進」をテーマに、世界各地域での平和への取組が紹介され、意見交換が行われました。初めに、フランス国内の取組と、新たな活動として地中海沿岸の都市の

目次

第8回平和市長会議総会 / 「第3回平和市長会議国内加盟都市会議」及び日本政府に対する「核兵器禁止条約」の早期実現に向けた取組の推進を求める要請文の提出 ① ~ ②
国際平和シンポジウム / 本財団理事長が地中海平和都市会議に出席 ③
被爆体験記「今を生きる」(白石多美子) / 被爆68周年平和記念式典 / 長崎原爆犠牲者慰霊の会 ④ ~ ⑤
《特集》中・高校生ピースクラブ「広島の中・高校生が発信する平和のメッセージ」 ⑥
平和への思い育む夏のキャン / 被爆体験講話会を開催 / ビースナイター2013 ⑦
ヒロシマ・ピースフォーラム / 英語で伝えようヒロシマセミナー / 広島平和記念資料館資料調査研究会研究報告第9号を発行 ⑧
広島・長崎講座(セントラルコネチカット州立大学) /

「だしのゲン」原画展「生きて生きて生きて抜いて」 / 国内ジャーナリスト研修「ヒロシマ講座」 ⑨
広島平和学習セミナー(岐阜市)を開催 / 岩手県盛岡市と新潟県長岡市で原爆展を開催 ⑩
「平和記念公園を創る 一丹下健三 生誕100年資料展」 / 「国際平和デー」記念行事 / 国連軍縮フェロウズの受け入れ ⑪
市民が描いた原爆の絵「ピカに遭った人々」 / 「新着資料展」 / 被爆体験の継承にご協力を ⑫
追悼平和祈念館のホームページをリニューアル / 追悼平和祈念館情報展示コーナーにスワールを設置 ⑬
「姉妹・友好都市の日」記念イベント ⑭
留学生による平和フォーラム / 留学生が書道体験ワークショップに参加 ⑮
《特集》国際交流フェスティバル「べあせろべ」30年の歴史に~FINAL~
「人生を豊かにしたボランティア活動」(延本眞栄子) ⑯

共催による平和会議の企画が紹介されました。他に、ドイツ、日本等の都市からも取組の紹介がありました。また、トルコ、イラクからは、化学兵器で多くの犠牲者を出したクルド人の歴史が紹介されました。

ベツィィ市長は、「参加者全員が、今日聴いたことを自国に持ち帰り、検討し、行動に移さなければならぬ。」と述べ、会議を締め括りました。

市民団体・被爆者団体との対話集会

「核廃絶に向け、私たち市民は何をすべきか」をテーマに、広島市立大学広島平和研究所の水本和美副所長のコーディネートにより、参加者と市民団体・被爆者団体との対話集会が行われました。

まず、広島県原爆被害者団体協議会の二人、及び市民代表として広島県生活協同組合連合会と広島女学院高等学校から、それぞれの取組について報告がありました。

次に、会場からの発言として、核兵器のドキュメンタリー映画の製作団体から、上映を通じた活動の紹介がありました。

水本副所長は、「様々な立場の人々に共通して、核兵器の非人道性・危険性、あるいは恐ろしさを訴え、禁止や廃絶を実現すべきだ」という共通認識が存在することを確認できた。」と会議を総括しました。

各国政府・NGO関係者等との対話集会

「核兵器廃絶に向けた各国政府、NGO等の役割」をテーマに、長崎大学核兵器廃絶研究センターの中村桂子准教授のコーディネートにより、参加者と各国政府・NGO関係者等との対話集会を行いました。

まず、ノルウェー、メキシコ、インドの各駐日大使館、外務省、赤字国際委員会及び国際NGO団体のICAN（核兵器廃絶国際キャンペーン）がそれぞれ活動の紹介を行った後、湯崎知事が「国際平和拠点ひろしま構想」についてスピーチを行い、続いて、会場からの発言と質疑応答が行われました。

中村准教授は、「核兵器の非人道性を、なぜ今語るのか、私たちはどこに向かうのかということ」を議論できたことは大変有意義だった。」と会議を総括しました。

平和のメッセージ

総会の特別ゲストとして、米国の映画監督、オリバー・ストーン氏が講演しました。

講演の中でストーン監督は、「被爆者は、復讐ではなく『愛のメッセージ』、戦争ではなく『平和のメッセージ』を生産掛けて発信してこられた。」と述べ、被爆者の存命中に核兵器廃絶を実現しなければならないと訴えました。



平和のメッセージを訴えるオリバー・ストーン監督

会議Ⅳ

松井市長の司会により、二〇二〇年までの核兵器廃絶に向けてというテーマで議論しました。

まず、会議Ⅱ・Ⅲ及び二つの対話集会の各コーディネーターが議論の総括を報告した後、会場からの発言と質疑応答が行われました。

続いて、松井市長が今回の総会の総括として、「ヒロシマアピール」を読み上げました。アピールは会場からの拍手で採択され、全ての議事は終了しました。

閉会式

最初に、岸田文雄外務大臣からの挨拶が代読されました。続いて、平和首長会議副会長の、アメリカ・アクリン市のドナルド・プラスケリック市長、田上富久長崎市長が挨拶を述べました。

最後に、松井市長が、総会への参加協力に対するお礼と、「皆さんの力を結集して二〇二〇年までの核兵器廃絶に向けた取組の強化を図っていき

たい。」と決意を述べ、総会は閉会しました。

「ヒロシマアピール」は、九月に国連事務総長及び各国政府に送付されました。「ヒロシマアピール」及び議案書は、平和首長会議ホームページ（www.nayorforpeace.org）で御覧頂くことができます。

（平和連帯推進課）

「第三回平和市長会議国内加盟都市会議」の開催及び日本政府に対する「核兵器禁止条約」の早期実現に向けた取組の推進を求める要請文の提出

平和首長会議（旧名称・平和市長会議）の国内における取組の充実を図るため、八月五日に、第八回平和市長会議総会に合わせ、第三回目となる国内加盟都市会議を広島市で開催し、全国から六十七自治体・百七人（うち首長三十四人）が出席しました。

会議では、最初に、平和市長会議から平和首長会議への名称変更、平和市長会議運営体制の充実方策等について、事務局が報告を行いました。次に、日本におけるリーダー都市

を広島市とすること及び日本国内を地域のグローバル化の区域とすること、「核兵器禁止条約」の早期実現に向けた取組の推進を日本政府に要請すること等について審議し、それぞれ原案どおり了承されました。

続いて、国内加盟都市会議の広島・長崎以外の都市での開催等について意見交換を行い、最後に、会議の概要等を盛り込んだ「第三回平和市長会議国内加盟都市会議総括文書」を採択して閉会しました。

会議での決定に基づき、九月十日に、松井広島市長（平和首長会議会長）と黒田長崎市長（東京事務所長が外務省を訪問し、「核兵器禁止条約」の早期実現に向けた取組の推進について、安倍晋三内閣総理大臣宛ての要請文を岸田外務大臣へ提出しました。

（平和連帯推進課）



要請文の提出（左から岸田外務大臣、松井市長）

国際平和シンポジウム 核兵器廃絶への道 核兵器の非人道性と被爆体験の 伝承

四月のNPT再検討会議第二回準備委員会で七十か国以上が賛同した「核兵器の人的影響に関する共同声明」の発表など、核兵器廃絶に向けた気運が高まる中、七月二十七日(土)午後、広島市と本財団、朝日新聞社の共催により、「核兵器廃絶への道」核兵器の非人道性と被爆体験の伝承」をテーマに、十九回目となる国際平和シンポジウムを広島国際会議場で開催しました。

基調講演

英国王立国際問題研究所のパトリシ

【プログラム】
【オープニング】 オープニングステージ / 広島市役所合唱団
【基調講演 / 「核兵器の非人道性と非合法化に向けた取り組み」】 基調講演者：パトリシア・ルイス (英国王立国際問題研究所・安全保障研究部長) 進行・解説：水本和美 (広島市立大学広島平和研究所所長)
【ゲストスピーチ】 森下洋子 (プリマバレリーナ、被爆二世、広島市名誉市民)
【パネル討論】 【パネリスト】 渡邊英徳 (首都大学東京システムデザイン学部準教授) / アンドルー・ゴードン (ハーバード大学歴史学部教授) / 保田麻友 (広島市被爆体験伝承者養成事業参加者) / 成田隆一 (日本女子大学人間社会学部教授) 【コーディネーター】 三浦俊章 (朝日新聞社GLOBE編集長)



パトリシア・ルイス氏(右)の講演内容をわかりやすく解説する水本和美氏(左)

ア・ルイス安全保障研究部長が、「核兵器の非人道性と非合法化に向けた取り組み」をテーマに基調講演を行い、広島平和研究所の水本和美副所長が内容を解説しました。

ルイス部長は、核兵器の非人道性を訴える動きが高まっている現状について、「段階的なプロセスを踏んでいては核軍縮が進まないことへの苛立ちがあり、より社会の関心を深めるため、ヒロシマやナガサキのメッセージを伝え、核兵器がもたらす破滅的な影響を考え直すようしている」と訴えました。

ゲストスピーチ

世界的に有名なプリマバレリーナの森下洋子さんが、被爆した祖母や母、そして被爆二世である自身の体験を元に「原爆は絶対にあってはならない。」と核兵器廃絶と世界恒久平和に向けた



平和への思いをスピーチする森下洋子氏

思いを語りました。

パネル討論

パネリストからの報告

渡邊英徳准教授「ヒロシマ・ア

ーカイブ (<http://hiroshimamapping.jp/>)は、被爆者、地元の人たちと製作者が手を取り合っており、未来に記憶を紡いでいこうという運動体なのです。それがデジタル地球儀上に展開されていて、誰でも見ることができるようになっています。

アンドルー・ゴードン教授「外国で原爆のことを伝える場合、自分が聞いたこと、自分が感じていることを普通の会話の中で話すことが一番いいと思います。また、言葉の壁がある場合には写真や映像などを見せながら話すというのではないかと思います。

保田麻友さん「学生だった私の世代は、子どもを持つ世代に変わりつつありま

す。自分の子どもに広島歴史を伝えることができない、広島で起きたことを伝えていきたい、そういった友人の声を聞きます。私たちは誰もが伝承者であり、責任があります。

成田龍一教授「被爆体験の伝承を巡っては長い時間をかけた営みがあり、その中で原爆文学が培われてきています。原爆は、これまでに人類が経験したことがない出来事であり、それ故に被爆を体験として伝承するという決意がなされていったと思います。

三浦俊章編集長「ユネスコ憲章に「戦争は人の心の中に起こるものだから、心の中に平和の芽を作らなければいけない」という言葉があります。今回のシンポジウムは、心の中に平和の芽を作る取組の一つかなと思います。(平和連帯推進課)



パネル討論の様子

本財団理事長が 地中海平和都市 会議に出席

地中海平和都市会議が、フランス・オバーニュ市、クロアチア・ビオグラード・ナ・モル市及びスペイン・グラナダ市の共催で、九月二十一日二十二日にオバーニュ市で開催されました。会議のテーマは「平和文化の発展における地域レベルの政策」で、フランス、スペイン、アルジェリア、キプロス、クロアチア等地中海沿岸国を中心に十五か国の平和首長会議加盟都市・自治体連合関係者等約百三十人と、本財団から小溝理事長が出席しました。

小溝理事長は、開会式で松井広島市長からのメッセージを代読するともに、スピーチを行いました。スピーチでは、ヒロシマのメッセージを世界の若い世代に伝え、相互理解に基づく核兵器のない平和な世界の構築に寄与したいと述べました。翌日、参加者はオバーニュ・アピールを採択し、オバーニュ市長等の挨拶を経て会議は閉会しました。

なお、平和首長会議では、加盟都市による地域活動の活性化を図ることを第八回総会で決定し、地域特性に応じた活動内容の決定や情報交換等を行う地域会議の開催を呼びかけています。(平和連帯推進課)



プロフィール
 (しらいし たみこ)
 1939年(昭和14年)生まれ。小学校1年生であった7歳の時、爆心地から4km離れた学校の教室で、本を開いたときに被爆。60歳で定年退職後、2000年(平成12年)からピースボランティアとして活動。今年度からは本財団被爆体験証言者として活動を始めた。

被爆体験記

今を生きる
 peace
 本財団被爆体験証言者

白石 多美子

私の被爆体験

一九四五年八月六日は、朝から雲一つない快晴で、お日様がキラキラ照りつけていました。私は宇品国民学校(爆心地から四キロメートル)の一年生で、七歳でした。いつもの通りに運動場を少し走り、机の横に防空頭巾をかけ、靴から本を出して開いた時に、右側の天窓から青白い光が見えました。

何だろうと思った時、耳を突き抜けるようなドーンという轟音と同時に窓ガラスが割れて、その破片が飛んできました。教室の中は一瞬にして大騒ぎになり、廊下の下駄箱へと泣きながら我先に行きましたが、靴や下駄は見当たりませんでした。

私は学校から自宅まで裸足で帰りました。帰る道にはガラスの破片がいっぱい飛び散っていました。家の前では母が私を待っていてくれました。私は頭に二か所、左手内側に二か所、そして足の裏には無数のガラスが刺さっていました。幸い軽傷でした。母がピンセットで小さなガラスを少しずつ抜き取ってくれました。

夜になり、眠りたくても眠ることの出来ないまま横になっていると、何の音も分からない、何かを引きずるような音が、家の前の道から聞こえてきました。いつの間にか眠り、翌朝、母に起こされて身

支度をして、外を見ると、その音が何であったか分かりました。髪の毛がチリチリになって立ち上がり、顔のほうから皮膚が垂れ下がり、その皮膚を引きずりながら避難する人たちの音だったのです。



『市民が描いた原爆の絵』
 作者 吉村 吉助
 「衣服は引き裂け皮膚はたれ下がりこの世の人とは思えぬ姿の負傷者たち。声も立てず黙々と郊外へ逃げていく。」

祖母の被爆

祖母は穏やかで優しい人で、向洋のほうに母の弟と一緒に住んでいました。一週間に一度くらい、藤で編んだ乳母車を押して、南京やさつまいも、その葉や茎などを私の家まで歩いて持ってきてくれました。祖母は八月六日の朝、いつものように私たちの家に行く

言って出て行ったまま、原爆に遭ったのです。

翌七日から、祖母を探しに爆心地付近まで救護所を次々回りました。一人で留守番をさせられないからと、母は私も一緒に連れて行きました。救護所に入ると、何とも言い表すことのできない臭いがしました。その臭いは、人も、動物も植物も、建物も、ヒロシマの全てを焼き尽くした臭いだと思いました。今でもその臭いを忘れることはできません。

八日のこと、多分、八丁堀近くの救護所だと思えます。私の足をつかまえて「水を」と言った人がいました。壊れた蛇口から水を手で受けて、その人の所に持って行きました。唇に水が一、二滴落ち、その人が「ありがとう」と言ったように聞こえた時、「その人に水をあげたらいいん」と言いながら私を突き飛ばした人がいました。すると少しして、その人が動かなくなりました。「あんたが水をあげたから、この人は死んだんよ」と言われたのが、今でも耳に残っています。

街には、家の下敷きになり手を挙げて死んでいる人、目を見開いて空を睨みつけるように道端に転がって死んでいる人、家の土壁の間に挟まれて半分焼かれ、もう半分は焦けたまま焼けていない状態で残っている人もいました。その時は

本当に怖かったのですが、必死で母の後を追いかけてきました。そんな所では母は手を合せて通っていました。私も母と同じように手を合せて通りました。人だけではなく、たくさん馬も死んでいました。中にはお腹がパンパンに腫れ上がった馬もいました。先へ進むためには、たくさん死んだ人たちや馬をまたいで行かなくてはなりませんでした。

九日、牛田のほうの救護所をいくつか回り、やっと祖母を見つけました。祖母は背中一面真っ黒に焼けて、うつ伏せになっていました。祖母を宇品にあった陸軍船舶部隊の施設に運んでもらうことができ、私も看病に行きました。私のすることと言えば、祖母の背中への傷にハエが止まるのを団扇で追い払うことです。それでもハエは傷口に止まり、いつの間にか卵を産みます。私の役目は体内に入ろうとする蛆虫を取ることでした。祖母は亡くなる前日に「しいちゃん(私の母)の作ったおすしが食べたい」と言いましたが、材料が手に入らず、結局おすしを食べることができませんになりました。

心の傷(トラウマ)と病

被爆してから、私は眠れない日が多くなりました。原爆の恐ろしい場面が夢に出てくるようになり、

被爆六十八周年平和記念式典

―原爆は、非人道兵器の極みであり「絶対悪」です―

被爆六十八年目の八月六日（火）、広島市の平和記念公園で、市主催の平和記念式典（広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式）が行われ、遺族ら約五万人が参列して犠牲者の冥福と恒久平和を祈りました。

式典は午前八時に始まり、最初に松井一實広島市長と遺族代表二人がこの一年間に亡くなったことが確認された五千八百五十九人の氏名が記帳された二冊の原爆死没者名簿を、原爆死没者慰霊碑の中の奉安箱に奉納しました。これで名簿登録者総数は二十八万六千八百八十八人、名簿総数は百四冊となりました。

続いて確井法明広島市議会議長の式辞、各代表による献花の後、原爆が投下された八時十五分に、遺族代表の迫田史織さんと、こども代表の伊藤麟太郎君が平和の鐘をつき、参列者全員が一分間の黙祷を捧げました。

この後、松井市長が平和宣言を行いました。松井市長は、被爆による身体への被害のみならず、放射線に対する恐怖による謂われの無い風評によっても苦しめられてきた被爆者

の体験談を紹介し、「無差別に罪もない多くの市民の命を奪い、人々の人生をも一変させ、また、終生にわたり心身を苛み続ける原爆は、非人道兵器の極みであり『絶対悪』です。」と力強く訴えました。そして、世界の為政者に、広島を訪れ、被爆者の思いに接し、過去にとらわれず人類の未来を見据えて、信頼と対話に基づく安全保障体制への転換を決断するよう呼びかけました。

また、核兵器の非人道性を踏まえ、その廃絶を訴える国が着実に増加してきていること等を挙げ、日本政府に、核兵器廃絶をめざす国々との連携を強化することを求めました。さらに、東日本大震災とそれに伴う原子力発電所の事故による被災者に思いを寄せ、日本政府に、国民の暮らしと安全を最優先にした責任あるエネルギー政策の早期構築、実行を強く求めました。

平和宣言の後、こども代表の竹内駿治君と中森柚子さんが、広島で六十八年間、命とともに親から子へ、孫へと、被爆の事実や被爆者の思いが伝えられてきたことを、バトンリ

レーに例え、「方法は違っていてもいいのです。大切なのは、わたしたち一人一人の行動なのです。さあ、一緒に平和をつくりましょう。大切なバトンをつなぐために。」と、平和への誓いを読み上げました。

安倍晋三内閣総理大臣は、あいさつの中で、核兵器のない世界を実現するため、二〇一四年に、日本が主導する非核兵器国の集まり、軍縮・不拡散イニシアティブの外相会合を広島で開催すること等を挙げました。

また、原爆症認定制度の見直しについて、有識者や被爆者の代表を含む関係者による議論を早急に進める考えを示しました。

式典には四十二都道府県の遺族代表、湯崎英彦広島県知事の他、ブーク・イエレミッチ第六十七回国際連合総会議長や、核兵器国のアメリカ、イギリス、フランス、ロシアを含む七十カ国と欧州連合（EU）の大使や代表も出席しました。

式典の様子はインターネットでライブ中継されました。式典で読み上げられた「平和宣言」、「平和への誓い」の全文は、広島市ホームページ（<http://www.city.hiroshima.jp>）の「原爆・平和」↓「平和宣言・平和への誓い・平和に関する要請等」から閲覧できます。平和宣言については八カ国語（アラビア語、中国語、英語、フランス語、ドイツ

語、ハンガール、ロシア語、スペイン語）の翻訳版も掲載されています。また、広島平和記念資料館ウェブサイト（<http://www.pcf.city.hiroshima.jp>）からも平和宣言を閲覧できます。（総務課）

長崎原爆犠牲者慰霊の会

本財団では、広島市と共催で、長崎に原爆が投下された八月九日に、同じ被爆地である広島から長崎の原爆犠牲者に哀悼の意を表し、平和への誓いを新たにすため、「長崎原爆犠牲者慰霊の会」を開催しています。

広島平和記念資料館一階ロビーで開催した今年の慰霊の会には、被爆者や国内外からの来館者など約百人が参加しました。

まず、長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典のテレビ中継を視聴し、原爆投下時刻の午前十二時二分に全員で一分間の黙とうを捧げました。

続いて、広島県原爆被害者団体協議会の坪井直理事長からご挨拶をいただき、最後に、長崎の被爆者証言ビデオ（証言者：青木茂さん）を視聴して閉会しました。（平和連携推進課）

原爆が投下された場面を思い出して飛行機が怖くなり、飛行機が飛んで来るたびに部屋の隅に隠れるようになりました。

小学三年生の春、私は四十度の熱と血便が止まらなくなり、赤十字病院に入院しました。医者は菌の出ない腸チフスだろうと言っていました。高熱と下痢で体は衰弱し、うわ言を言うようになった私のことを、病院の洗濯場で「今日も大きな声を出していたよ」「あの子はまだ死んでないんじゃないかね」と母に話しかけてきた人がいたそうです。私にその話をした母の、辛そうな姿が今でも目に浮かびます。

これからを担う皆さんへ

私は母の死がきっかけでピースボランティアをはじめましたが、それまでは被爆体験や祖母の被爆死について話すことができませんでした。できることなら忘れ去りたいと心の奥にしまいこんでいたのです。しかし、活動をしているうちにヒロシマや原爆のことを知らない人が多いことに気づきました。原爆がこのような醜いことを引き起こすことを覚えていくべきです。平和な世界が続くよう、皆さんが核兵器廃絶について考えていくべきことを願っています。

これは短縮版です。被爆体験記の全文は、ウェブ版機関紙でご覧になれます。

《特集》中・高校生ピースクラブ 広島の中・高校生が発信する 平和のメッセージ



平成十四年度から、広島市と本財団は、平和の推進に取り組む人材育成のため「中・高校生ピースクラブ」を開催しています。今年度は二十六人が参加し、被爆の実相を学び、他の自治体の中・高校生との平和学習会などを通じて平和の大切さを発信しています。

八月三日(土)～八月五日(月)

第八回平和市長会議総会のフーズ展示

第八回平和市長会議総会の開催にあわせて広島国際会議場にフーズを設置し、ピースクラブの活動を紹介するとともに、平和へのメッセージを集めました。総会に参加された市長等から、「中・高校生が自主的に平和活動をしていることは素



フランス・マラコフ市代表ミシェル・シボ氏にメッセージを書いていただきました。

晴らしい。さすが広島ですね。頑張ってください。」など、ピースクラブへの温かい激励の言葉と平和のメッセージをいただき、平和を発信するために活動を続けていくことの大切さを改めて感じることができました。

八月五日(月)

ヒロシマ青少年平和の集い

中国新聞社ビルで開催した平和学習会に、八つの自治体から八十六人の中学生が参加しました。川本省三さんの被爆体験講話を聴講した後、ピースクラブがファシリテーター役(進行役)を務め、グループワークを進めて行きました。「私たちの未来予想図2045」をテーマに、原爆投下から百年後の二〇四五年はどんな世界になっているのか、その時が平和な世界であるために自分たちは何をすべきか、という話を話し合いました。「いじめをなくす」といった身近なことを題材にしたグループや、「国境をなくす」といった世界に目を向けたグループなどがあり、多様な意見が出ました。様々な自治体の中学生と意見を交わすことにより、原爆だけでなく、広い視野で平和を考えていく大切さを学ぶことができました。



「ヒロシマ青少年平和の集い」のグループワークでファシリテーター役を務めました。

八月六日(火)

サダコと折り鶴ポスター展

平和記念資料館の本館下で、被爆から十年後に白血病を発症して亡くなった佐々木禎子(さだこ)さんの一生を通じて被爆の実相を伝える「サダコと折り鶴ポスター展」を開催しました。被爆の実相をわかりやすく伝えるために、原子爆弾に使用されたウランの模型を使って爆弾の仕組みを説明するなど、工夫を凝らしていました。また、英語での説明に挑戦したメンバーもあり、国内外の多くの人に被爆の実相と平和の大切さを伝えることができました。

動をすることは大切な。是非、続けて行って欲しい」「これまで八月六日にこの場所に来ることを避けていたが、来年も来たい(被爆者)」など、温かいメッセージをいただきました。さらに、広島出身のピアニスト秋原麻未(あきはらまみ)さんの来場など、色々な方々との出会いがあり、多くのことを学びました。



「サダコと折り鶴ポスター展」で手作りの模型を使って原子爆弾の仕組みを説明しました。

八月八日(木)～十日(土)

長崎研修

長崎市で開催された青少年ピースフォーラムに参加しました。このフォーラムは、八月九日に開催される長崎の平和祈念式典に参加するために長崎市を訪れる、全国の自治体の平和使節団が一堂に会して平和の尊厳(うんげん)について考える学習会で、長崎市の青少年ピースボランティア(十五歳から三十歳)が運営しています。広島から長崎までバスで片道五時間というハードな日程でしたが、全国の青少年と平和について意見交換し、長崎市の青

少年の平和活動も学ぶことができ、大変充実した学習会になりました。



田上長崎市長にピースクラブ参加者からのメッセージボードを手渡しました。

これまでの活動を通して、ピースクラブの参加者からは、「もっと多くの人に被爆の実相を知ってもらうために活動していきたい」「原爆だけでなく、戦争による被害をもっと学んで、平和の大切さを伝えたい」などの感想が寄せられ、平和活動への関心は高まっています。ピースクラブではこれからも被爆の実相を伝え、平和への思いを発信するために被爆ピアノコンサートの開催など様々な活動に取り組んでいきます。

また、長崎市の青少年ピースボランティアや、平和活動に取り組んでいる他府県の中・高校生とのネットワークを築いていけるよう、仲間を増やしていきたいと思っています。これからも温かい御支援をよろしくお願い致します。

(平和記念資料館 啓発課)



慰霊碑めぐりでピースボランティアの説明を受ける参加者

平和への思い育む 夏のキャンプ

本財団では、三滝少年自然の家と似島臨海少年自然の家との共催で、小学四年生から中学三年生までを対象に、「こども平和キャンプ」を開催しました。八月二日から四日にかけて行われたキャンプには、小学生三十二人、中学生五人、ボランティア八人が参加しました。

最初に参加者同士との交流を図るため、折り鶴を利用した花輪を班ごとに作成しました。完成した花輪は原爆死没者慰霊碑へ捧げ、原爆犠牲者の冥福を祈りました。その後、ヒロシマピースボランティアの案内で、平和記念公園内の碑めぐりや平和記念資料館の見学を通して被爆の実相などについて学んだほか、戦時中の食事体験として、折免滋君の弁当（再現したもの）を試食しました。

三日間のプログラムの中で特に参加者に好評だったのが、似島臨海少年自然の家での海水プール、バウムクーヘン作りでした。友達と協力しながら丹念に焼き上げたバウムクーヘンのおいしさと、団結して作る喜びを味わうとともに、なぜ似島がバウムクーヘン発祥の地となったのか、その歴史についても学びました。

参加者にとって夏の思い出の一ページになるとともに、戦争と平和を考える良い機会になりました。また、八月六日には、小中学生二十四人とボランティア四人が、平和への気持ちを胸に平和記念式典に参列しました。

(平和記念資料館 啓発課)

被爆体験講話会を開催 被爆の実相を 多くの方に

本財団は今年度も、平和記念公園を訪れる人々が、事前に申し込むことなく被爆体験を聴くことができる「被爆体験講話会」を開催しました。

八月の四日（日）から六日（火）まで、十三日（火）・十四日（水）、十月の四日（金）・五日（土）の計七日間、全十六回の被爆体験講話（うち四回は英語）と原爆に関するアニメーションの上映を行いました。

期間中、小さな子どもから戦争



被爆の実相を語る被爆体験証言者

を体験した世代の人まで、広島県内外から延べ千五百五十八人の来場があり、皆熱心に講話に耳を傾けていました。

アンケートでは「平和の尊さ、大切さについて、改めて考えるきっかけとなった」「周りの人たちにも伝えたいと思う」などの声が寄せられました。

(平和記念資料館 啓発課)

ピースナイター 二〇三三の開催

八月六日（火）、本財団と生協ひろしま等との共催により、カープ応援の場を活用して核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に向けたメッセージを発信する「ピースナイター二〇三三」を、マツダスタジアムで開催しました。

ピースナイターでは、
① 大型ビジョンで松井市長や湯崎知事等の平和を願うメッセージを放映しました。
② 広島県府中町出身の歌手で俳優の吉川晃司氏が始球式を行いました。



緑色と赤色のピースポスターを用いて原爆ドームと同じ高さに「ピースライン25」を作る観戦客

③ カープの監督、選手等がピースワッパンを着けてプレーしました。
④ 五回裏終了時に、原爆ドームと同じ高さに赤色の線「ピースライン25」を作り、平和への願いをアピールしました。また、グラウンドでは、吉川氏が「イマジン」を独唱するとともに、地元高校生等が「ピースパフォーマンス」を行いました。

今年は、セ・リーグ全球団の賛同を得て、八月六日の公式戦三試合全てで平和や東日本大震災からの復興を願うイベントが開催され、多くの方が核兵器廃絶及び世界恒久平和について考える日となりました。

(平和連帯推進課)

ヒロシマピースフォーラム



ピースフォーラム（第3回）で講演する映画美術監督の部谷京子さん

本財団では、広島市と共催で、市民が「平和の原点」としての「ヒロシマ」を見つめ直し、原爆や平和について考え、どのように行動していけばよいかを探索する機会を提供するため、「ヒロシマ・ピースフォーラム」を開催しています。昨年度に続き、広島市立大学の講座「広島からの平和学」と連携して、五月から七月までの隔週土曜日に全六回開催し、同大学の学生を含む十代から七十代までの約百二十人が参加しました。

平和記念資料館では、原爆被害に関する基礎知識を英語で伝える方法について学ぶ「英語で伝えようヒロシマセミナー」を実施しています。

英語で伝えよう ヒロシマセミナー

五月二十六日（日）と七月二十一日（日）に実施した「一般の部」には、海外渡航の予定や、

フォーラムでは、国際情勢、医療、都市計画、芸術、報道など多角的な面から、原爆や平和について考える講座を用意することもに、グループ討議と最終回での発表により、参加者間で活発な意見交換ができる内容としました。

参加者のアンケートでは、「年の離れた方々と議論することがあまりなかったのが、貴重な時間でした」、「色々な方の意見が伺えてとても良かった。講師の方のお話もとても良く、自分の意見もだんだんまとまってきた」といった感想が寄せられました。

五月の第二回セミナーの後半部分では、ネウィットさんと広島市国際交流員のクリストファー・キャメロンさんが講師となり、平和記念公園に関する質問や、そのほかの広島の名所等について英語でどのように答えるかをグループで話し合い、発表しました。

広島平和記念資料館 資料調査研究会 研究報告を発行

平和記念資料館資料調査研究会の調査研究活動の成果をとりまとめた「広島平和記念資料館資料調査研究会研究報告」第九号を八月一日に発行しました。執筆者とテーマは次のとおりです。

五月の第一回セミナーの後半部分では、広島市立大学平和研究所のロバート・ジェイコブズ准教授が、「米国における『ヒロシマ』の定義と現代の核兵器開発」と題し、原爆投下後これまでの米国内での「ヒロシマ」に対する認識や、新型かつ小型の核兵器開発等について講演しました。



5月26日に開催された「一般の部」において、ジェイコブズ准教授の話に熱心に耳を傾ける参加者の皆様

- ◆《会員研究報告》
- ◆北川建次（広島大学名誉教授）「広島を訪ねる修学旅行生の動向について」
- ◆肥塚隆保・高妻洋成・脇谷草一郎・柳田明進「被爆資料等についての保存科学的研究―劣化と保存状態に関する調査とその保存・保管法の研究―」
- ◆水本和実（広島市立大学広島平和研究所副所長）「原発事故は日本の核政策を変えるか―2011年の核をめぐる動向と論調―」
- ◆横山昭正（広島女学院大学名誉教授）「市民が描いた原爆の絵」に刻まれた被爆者の最期の姿―8月6日から11日まで―
- ◆《資料調査報告》
- ◆福島在行（平和記念資料館学芸員）「第19回日本平和博物館会議の開催について」



セントラルコネティカット州立大学と広島
の大学生のディスカッションの様子

広島・長崎講座 セントラルコネ ティカット州立 大学の現地学習

「広島・長崎講座」を開設して
いるアメリカのセントラルコネテ
ィカット州立大学が、七月十一日
(木)から十三日(土)にかけて、
今回で六回目となる広島での現地
学習を行いました。

教員二人・学生十五人の一行は、
笠岡貞江さん、松島圭次郎さん
による被爆体験証言の聴講、平和
記念公園や広島平和記念資料館の
見学、国立広島原爆死没者追悼平
和祈念館での原爆詩の朗読等を通
じて、被爆の実相を学びました。
また、旧日本銀行広島支店や

漫画「はだしのゲン」の連載
が「週刊少年ジャンプ」で始まっ
てから、平成二十五年で四十年を
迎えました。平和記念資料館では、
四十年の節目を記念し、漫画「は
だしのゲン」の原画展を、七月
十九日から九月一日まで、当館東
館地下一階の展示室(五)で開催
しました。

「はだしのゲン原画展
ー生きて生きて生きて
きぬいてー」を開催

袋町小学校平和資料館などの被
爆建物を見学し、建物に残された
メッセージや被爆の爪痕をたどり
ました。
更に、広島の大生とのグルー
プディスカッションを通じて、核
兵器廃絶に向けて世界がすべきこ
とやエネルギー問題などについて
率直な意見交換を行いました。
(平和連帯推進課)



連日、多くの観覧者が訪れました

今回の原画展では、漫画「はだ
しのゲン」や「絵本はだしのゲン」
の原画、幻の作品となった「はだ
しのゲン」第二部の下書きなど
六十五点のほか、漫画を大きく拡
大したパネルを十五点展示しまし
た。また、作者中沢啓治氏の生
い立ちや被爆体験を紹介した映像
作品「はだしのゲンが伝えたいこ
と」を会場で上映しました。
夏休み期間の開催で、家族連れ
など多くの観覧者が訪れました。
皆さん、原爆・戦争への怒り、生
き抜く強さ、平和の尊さが込めら
れた原画を熱心に見ていました。
来場者アンケートには「原画
を直接目にして、作者の深い思い、
魂を感じた」「自分は小学生のこ
ろ読んだ。自分の子供にも読ませ
たい」などの声が寄せられました。
(平和記念資料館 学芸課)

国内ジャーナリスト研修 ヒロシマ講座

被爆から六十八年が経過し、
被爆者の高齢化が進むとともに、
被爆体験の風化や若者の平和意
識の低下が懸念されています。

こうした中、広島市では、人
類史上最初の被爆地として、核
兵器の廃絶と世界恒久平和の実
現に向けた世論の醸成を図るた
め、平成十四年度から国内ジャ
ーナリスト研修「ヒロシマ講座」
を実施しています。

この講座は、国内の新
聞社の若手ジャーナリス
トを対象に、被爆の実相
や被爆地広島の課題、核
兵器を取り巻く世界情勢
等について総合的・体系
的に学ぶ研修プログラム
を開設し、研修の成果を
報道や説話活動等を通じ
て広く国内外に発信して
いただくことを目的とし
ています。
十二回目となった今年
の講座は、地方紙の記者



原爆被害に関する講義を受ける研修参加者

九人が参加し、七月二十八日(日)
から八月七日(水)までの十一
日間、被爆者の証言の聴講、原
爆被害に関する講義や広島の日
ジャーナリストからのアドバイ
スなどを受けるとともに、平和記
念式典参列や被爆体験伝承者へ
の取材活動などを行いました。
参加者は、この研修を通じて
学んだ被爆者の体験談や平和へ
の思いを、各地方紙に掲載し、
ヒロシマの心を広く伝えました。
【お問い合わせ】
広島市市民局国際平和推進部平
和推進課まで
☎(082) 242・7831

広島平和学習セミナー(岐阜)を開催しました

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館では、広島での平和学習プログラムを全国で紹介することにより、二十一世紀を生きる子どもたちが一人でも多く広島を訪れ、ヒロシマを知り、平和の大切さを学ぶことができるよう、学校関係者や旅行会社などを対象として、広島平和学習セミナーを開催しています。

七月二十三日に十七回目のセミナーが岐阜県岐阜市で開催され、岐阜県及び愛知県など近隣県から、学校、旅行会社、被爆者団体の関係者二十四人が出席しました。

プレゼンテーション「広島での平和学習とその効果」

原爆によって壊滅的な被害を受け廃墟と化した広島が国際平和文化都市として復興を遂げる様子や、平和記念公園内の数多くの慰霊



プレゼンテーション風景

碑やモニュメント、旧日本銀行広島支店などの被爆建物を紹介しました。また、平和記念公園めぐり、被爆体験講話、被爆体験記朗読会などのプログラムや、広島への修学旅行の例を紹介しました。

プレゼンテーション「広島での修学旅行」

広島平和記念資料館の入館者数調べによる地域別の修学旅行の状況を紹介するとともに、中学生を対象とした岐阜から広島への二泊三日の修学旅行のモデルコースの提案や、広島でできる体験学習を具体的に紹介しました。

被爆体験記朗読の実演等

新たな体験型平和学習プログラムとして被爆体験記や原爆詩の朗読会、及びその開催状況を映像で紹介するとともに、朗読ボランティアによる実演を行いました。



被爆体験記の朗読実演風景

参加者の声

参加者からは、「平和な時代を当たり前のようには生きていない子どもたちこそ広島を感じさせてあげることが必要だと思った」、「平和学習としてとてもよいと思う。生徒に本物を伝え、そこから考えてほしい」、「朗読の力(伝達力)に圧倒され、心に深く響き、感動した。」などの意見が多く寄せられました。(原爆死没者追悼平和祈念館)

岩手県盛岡市と新潟県長岡市で原爆展を開催

本財団では、原爆被害の実相を伝え、核兵器廃絶への機運を高めるため、平成八年度から国内主要都市で原爆展を開催しています。

本年度は次の二都市で開催し、両市合わせて約四千二百人の方が来場されました。

【盛岡市】

期間：八月一日(木)～

六日(火)(六日間)

場所：いわて県民情報交流センター

ター アイーナ

【長岡市】

期間：八月十日(土)～

十四日(水)(五日間)

場所：シティーホールプラザ

アオーレ長岡

展示会場では、被爆の実相や核兵器の現状を伝える写真パネルや被爆資料の展示のほか、市民が描いた原爆の絵の展示等を行

いました。両市とも子連れで来場された方が多く、親子揃って真剣なまなざしで展示物を見る姿が見受けられました。

また、盛岡市では新井俊一郎さんが、長岡市では岡貞江さんが被爆体験証言を行いました。両市とも、たかさんの市民が来場され、被爆体験証言者の言葉に熱心に耳を傾けていました。

来場者からは、「これからはもう忘れてはいけないことだと感じました」、「核兵器というものの恐ろしさを改めて実感しました」などの感想が寄せられました。(平和記念資料館 啓発課)



会場の様子(於長岡市)

平和記念公園

を創る

―丹下健三生誕 100年資料展―

平和記念資料館では、丹下健三氏に関連した資料展を、八月一日から九月二日まで、当館東館地下一階で開催しました。



「国際平和デー」 記念行事の開催

国連では、毎年九月二十一日を「国際平和デー」と定め、世界の停戦と非暴力の日として、この日一日敵対行為をやめるよう呼び掛けています。

この趣旨に賛同し、本財団では、松井一貫広島市長参加の下、国際平和デーの正午に、「二〇二〇年までの核兵器廃絶を！」という平和首長会議の

計した平和記念公園を中心に広島との関わり（しんかん）に焦点を当てました。旧制広島高等学校時代に建築家を志したエピソードや、公園を東西にまたぐ巨大アーチがあった当初の平和記念公園構想、また型枠段階の原爆死没者慰霊碑の写真等、十三枚のパネルで説明しました。

近年の当館資料展の中でも特に多くの来場者を集め、「『世界の丹下』の出発点が平和記念公園のデザインだったことに驚いた」等の感想が寄せられました。（平和記念資料館 啓発課）



慰霊碑前で黙とうを捧げる参加者

横断幕を掲げ、原爆死没者慰霊碑に一分間の黙とうを捧げるとともに「平和の鐘」を鳴らし、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現を祈念しました。また、平和首長会議の呼び掛けにより、国内外の加盟都市においても様々な記念行事が開催されました。（平和連帯推進課）

国連軍縮フェロ ズの受け入れ

軍縮の専門家を育成する目的で国連が主催する「国連軍縮

フェローシップ計画」の研修生（フェローズ）を、九月三十日（月）から三日間、広島に受け入れました。

国連軍縮フェローシップ計画は、国連が昭和五十四年（一九七九年）から実施している研修事業であり、昭和五十八年（一九八三年）から毎年広島で受け入れを行い、これまでに約八百人が来広しています。

今回は、二十五か国の若手外交官二十五人が参加し、三十日（月）に広島に到着した後、歓迎レセプションに出席、被爆体験証言者など地元参加者と交流しました。

翌日、一行は原爆ドームや原爆の子の像の見学、原爆死没者慰霊碑への献花を行うとともに、広島平和記念資料館、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館を訪れたほか、松島圭次郎氏による被爆体験証言を聴講し、被爆の実相についての理解を深めました。また、本財団の小溝泰義理事長から平和首長会議についての説明を受け、説明後には一行



平和記念資料館について副館長から説明を受けるフェローズ一行

と小溝理事長とで核兵器廃絶に向けた取組について熱のこもった質疑応答が行われました。フェローズのワン・シャオユウ団長は「広島で学んだ多くのことは、核兵器廃絶に取り組んでいる我々にとって心の支えとなる。」と述べ、また、一行からは「広島の人々のメッセージを必ず帰国後伝える。」「プログラムのどのパートもしっかり計画されていた。広島街も、人も、とても好きになった。」といった感想が寄せられました。（平和連帯推進課）

広島平和記念資料館 東館地下一階 展示室(四)で開催中

いずれも無料

市民が描いた原爆の絵

ピカに遭った人々

■期間 平成26年6月15日(日)まで

昭和四十九年(一九七四年)、N

HK広島放送局の呼び掛けで、市民から二千二百二十五点の絵が寄せられ、後に平和記念資料館に寄贈されました。平成十四年(二〇〇二年)には、当資料館、NHK広島放送局及び中国新聞社が募集し、千三百三十八点が寄せられました。その後も「原爆の絵」は描かれ続けています。当館では、それらの中から毎年テーマを定め、作品を展示しています。

今回は、原爆という大災禍の中を生きるさまざまな人々をテーマに、三十四点の絵を展示しています。

原子爆弾は一瞬のうちに街を壊

滅させ、老若男女の区別なく多くの命を奪いました。かろうじて生き残った人々も多くが傷つき、家や家族を失い、避難場所を求めてさまよひ、苦難に満ちた日々を生きたければなりません。これらの絵からは、死の危機に直面した人々の苦しみや悲しみ、日常を一変させた原爆の非人道性とともに、被爆後の世界を生き抜いてきた被爆者からのメッセージが伝わってきます。絵を通して、原爆被害の実相に接していただければと思います。

【お問い合わせ】
平和記念資料館 学芸課
☎(082) 241-4004



作者 高原良雄さん

「新着資料展」を開催しています

■期間 平成26年6月15日(日)まで

広島平和記念資料館では、原爆被害の実相を伝えるために、被爆者やその遺族が所蔵している被爆資料や遺品、写真などの収集に努めています。平成二十四年度は、新たに六十七人の方から、九百五十点の寄贈がありました。その一部を展示しています。

大切にしていた仏像

山田幹夫(みきお)さんの父・山田明(あきら)さん(当時三十一歳)は、爆心地から約三キロメートル離れた尾長町の自宅で被爆しました。屋根は吹き飛びましたが、けがはなく、翌日から家族を捜すため市内中心部へ入りました。この仏像は、立町で靴



家族の形見として大切にしていた仏像
寄贈/山田幹雄氏

屋を営んでいた兄夫婦の自宅焼け跡で見つけました。防空壕の前に、二体の遺骨があり、明さんは兄とその妻だと思いました。六人兄妹のうち末っ子だった明さんだけが生き残り、兄姉の親族を含め十人以上が亡くなりました。

寄贈者の話から

「たたくさんの家族を二度に亡くした父は、亡くなるまで原爆についてほとんど語ることはありませんでした。この仏像を二番見るところに置き、とても大切にしていました。自分が死んだら資料館に預けてくれてと言っていました。その死後にも大切にしていたため、その死後も手放すことができませんでした」

た。八月に母も亡くなり、ようやく寄贈する決心ができました。」

【お問い合わせ】
平和記念資料館 学芸課
☎(082) 241-4004



平成24年度に寄贈された資料のうち99点を展示しています

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館のホームページをリニューアルしました

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館では、多くの方に当館を知っていただき、また、来館していただくよう、ホームページを公開し、インターネットを通じて四か国語（日本語、英語、中国語、韓国・朝鮮語）で当館を紹介しています。このたび、より分かりやすいホームページに改善するため、平成二十五年（二〇一三年）六月二十八日、日本語・英語のページ（日本語・

<http://www.hiro-tsuitokenkan.go.jp/> / 英語・<http://www.hiro-tsuitokenkan.go.jp/english/index.php>）をリニューアルしました。主な変更は次のとおりです。

当館を紹介するムービー「記憶との出会い」を掲載しました

九分十七秒の映像で、入口から追悼空間、遺影コーナー、体験記閲覧室、情報展示コーナーなど、当館の施設や所蔵する資料の閲覧方法などについて具体的に案内しています。

企画展三面シアターの映像を掲載しました

当館では、情報展示コーナーで、毎年テーマを定めて企画展を開催しており、展示している

被爆体験記を映像により分かりやすく紹介する三面シアターを設置し、英語字幕付きで、二十分程度で上映しています。

この三面シアターの映像については、平

和学習用資料として学校や団体への貸出を行っています。来館者から、自宅や学校など館外で見たいという要望が寄せられていたため、ホームページに掲載しました。

これらの映像は、パソコンだけでなく、スマートフォンやタブレット端末でも閲覧可能です。今後とも、より使いやすく、分かりやすいホームページ作りに努めてまいります。ぜひご利用ください。

情報展示コーナーにツールを設置しました

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館では、情報展示コーナーで、毎年テーマを定めて企画展を開催しており、被爆体験記を中心とした展示により被爆の実相を伝えています。また、展示している被爆体験記を分かりやすく紹介する、英語字幕付きの二十分程度の映像を、情報展示コーナーに設置された三面シアターで上映しています。

このコーナーは、当館地下一階エスカレーター降口のすぐ左側にあり、多くの来館者に見学いただいておりますが、「高齢のため、立ったままで映像を見るのがつらい」、「多くの人に最後まで見ていただくため椅子を設置して欲しい」などの要望が寄せられていました。

このたび、要望に応えるため、多くの方が来館される八月六日、平和記念式典当日に間に合うよう、情報展示コーナー中央展示台を撤去し、十脚のツールを設置しました。

ツール設置後は、多くの方に座ってじっくりと映像を見ていただいています。

（原爆死没者追悼平和祈念館）



トップページ（日本語）

この三面シアターの映像については、平

和学習用資料として学校や団体への貸出を行っています。来館者から、自宅や学校など館外で見たいという要望が寄せられていたため、ホームページに掲載しました。



ツール設置後の情報展示コーナーの風景

被爆資料、原爆死没者の氏名・遺影、被爆体験記募集 被爆体験の継承にご協力を

広島平和記念資料館と国立広島原爆死没者追悼平和祈念館は、被爆体験を継承するための貴重な資料の収集を行っています。皆様のご協力をお願いいたします。

- 被爆資料―被爆された時に身につけられていた衣服など、被爆の事実を直接ものがたる実物資料。
- 氏名・遺影―原爆死没者の氏名・遺影（氏名のみ登録も可能）。
- 被爆体験記―被爆者の体験記や、遺族・友人の追悼記など。

【お問い合わせ】
被爆資料について
広島平和記念資料館 学芸課
電話 (0882) 241・4004

氏名・遺影、体験記について
国立広島原爆死没者追悼平和祈念館
電話 (0882) 543・6271

「姉妹・友好都市の日」記念イベント 姉妹・友好都市 を市民に紹介

広島市は、海外に六つある姉妹・友好都市を市民のみなさんに身近に感じてもらう、友好の持つ意味をより深く理解していただくため、都市ごとに「姉妹・友好都市の日」を設けています。

各都市の日を記念してイベントを開催しました。各イベントの司会・進行役は、公募により選ばれたヒロシマ・メッセンジャーが務めました。

モントリオールの日

七月七日(日)、広島市留学生会館で記念イベントを開催しました。主催ー平成二十五年度モントリオールの日実行委員会

まず来場者は、スモークミートや克蘭ベリージュースなどのモントリオールのグルメに舌鼓を打ちました。

セレモニーの後、ヒロシマ・メッセンジャーの田中秀穂さんがモントリオール市のお祭りについて、モントリオール在住のクロード・イアモニコさんと藤田邦子さん、深優さん親子が同市での暮らしについて、紹介しました。

記念コンサートでは、国際的ジャズフェスティバルで有名なモントリオールにちなみ、ジャズコンサートをを行い



記念コンサートの様子

ました。広島市在住の岸本優子さんとム・サザンさん、石井聡至さんのトリオが、カナダ出身の歌手セリヌ・ディオンの「マイ・ハート・ウィル・ゴー・オン」などを披露し、会場は大いに盛り上がりました。

イベントの最後には、スモークミートなどの特産品が当たるお楽しみ抽選会を行いました。

この他、カナダ特産品の展示や、モザイクカルチャー(花と緑で作る風景アート)国際大会二〇一三モントリオールの紹介などを行いました。

約三百二十人の来場者は、楽しみながらモントリオールやカナダへの理解を深めていました。

ハノーバーの日

八月二日(金)、広島国際会議場で記念イベントを開催しました。主催ー



ドイツ製法バウムクーヘンの試食

平成二十五年度ハノーバーの日実行委員会
まず、試食・試飲として、ハノーバーと交流の深い上田宗箇流茶道の体験、本場ドイツ製法のソーセージの試食、バウムクーヘンの試食、ドイツ菓子作りの実演、ルツェラゲ(二つの小さなグラスに異なる酒などを注ぎ、一気に飲み干すハノーバー独特の飲み方)を行い、どのコーナーも大勢の人で賑わいました。

この他、ハノーバー・ドイツの紹介展示では、広島市とハノーバー市交流三十年の歴史のパネル展示、ハノーバー電車ペーパークラフト体験、ドイツ絵本の紹介・読み聞かせのコーナーを設け、各コーナーとも大好評でした。

平成二十五年は姉妹都市提携三十周年の記念の年であるため、ハノーバー市代表団がイベントに参加され、セレモニーで代表者が挨拶されました。そ

の後、広島市訪問団の一員としてハノーバーを訪れたヒロシマ・メッセンジャーにより、ハノーバーの街や企業などの紹介を行いました。

次のドイツ音楽コンサートでは、四組のプロの音楽家が、ドイツ関連の音楽を中心に素晴らしい演奏を披露し、来場者を魅了しました。

約四百二十人の来場者は、多彩なプログラムを通し、楽しくハノーバーやドイツへの理解を深めていました。

ボルゴグラードの日

九月八日(日)、広島市留学生会館で記念イベントを開催しました。主催ー平成二十五年度ボルゴグラードの日実行委員会

来場者には、ピアノの生演奏を聴きながら、ロシア名物料理のピロシキやロシアンケーキの試食、そしてグルジアワインの試飲などを楽しんでいただき、多くの方に大変おいしかったと言っていたきました。

ホールでのセレモニーでは、実行委員長、広島市長、ボルゴグラード市長(代読メッセージ)、在大阪ロシア連邦領事参事官に挨拶をいただきました。その後、ヒロシマ・メッセンジャーによるロシア語講座やクイズがありました。特にロシア語講座は、「ロシア語をはじめ身近に感じた」など大変好評でした。

続くロシア音楽コンサートでは、最初に、広島合唱団代表の高田龍治さ

ん指揮、田中香月さんピアノ伴奏により合唱が行われ、来場者は、ロシア民謡「トロイカ」などのメドレーを一緒に歌うなどして楽しみました。次に、様々な楽器を使用する演奏家や作曲家の団体、アンサンブル・アカにより、ロシア国歌演奏などがあり、最後に、広島ジュニアマリンバンドアンサンブルによる演奏が行われました。異なる音色で奏でられる多様なロシア音楽に、会場は拍手喝采でした。

この他、ロシア・ボルゴグラードの紹介展示コーナーもあり、ロシアの民芸品やボルゴグラード市の風景、交流の様子の写真などを展示しました。約二百五十人の来場者は、イベントを通し、ボルゴグラードやロシアへの関心や理解を深めていました。

(国際交流・協力課)



ボルゴグラード市紹介展示の様子

被爆体験講話会を開催 「ヒロシマの心」を 母国に

留学の地として広島を選んだ留学生に「ヒロシマの心」を理解してもらい、母国に広めてほしいとの願いを込めて、今年度も二部構成による平和フォーラムを開催しました。

八月三日（土）

（第一部）平和学習会 「被爆の実相を学ぶ」

講師は平野由美恵さん（元NAC（ネバーアゲインキャンペーン）平和大使、被爆体験伝承者・研修生）で、今回は初の試みとして、英語と日本語による講義がそれぞれ一時間、当会館研修室で行われました。

最初は英語による講義で、「被爆の爪痕」という十分間のDVDを鑑賞した後、日本の歴史や被爆当時のヒロシマの様子、原爆による被害の実相などを写真や絵を使用しながら、詳細に説明されました。日本語よりも英語の方が理解しやすいインドネシアなどの留学生が十人参加しました。英語で質疑応答もでき、より深く理解出来

たと大変好評でした。

次に、日本語による同じ内容の講義が行われました。これには、中国、モンゴル、ベトナム、韓国などの留学生三十四人が参加しました。難しく聞き取れない言葉は、画用紙に大きな字で書いて示すなど、講師の工夫と熱意がよく伝わってきました。

アンケートの回答には、原爆について「初めて知った」、「想像以上だった」、「放射能の影響で未だに苦しんでいる人がいること、結婚などで差別された被爆者がいたことなどを初めて知った」などの感想が寄せられました。「原爆に関する考え方が変わった」との回答が八十三パーセン

トを占め、言語別の学習により、理解をより深めることができました。事実を知ることによって、留学生の意識は大きく変わっていきました。

八月六日（火）

（第二部）平和記念式典参列

留学生とその友人を含む三十人が式典に参列しました。大勢の市民が参列する式典で、多くの



平和記念式典の外国人席にて参列

ボランティアの方々、早朝から冷水やおしぼりのサービス、席への誘導など、炎天下で真摯にサポート活動をしている姿に、留学生は大変感動し、その様子から市民の平和への関心の高さを感じとりました。また、式典を通して、平和の尊さをあらためて感じたように見受けられました。

参列後のレポートには、「原爆は絶対悪であることを再認識した」、「広島が素晴らしい復興を遂げたことに感動した」、「母国の人々に真実を伝えたい」などの感想が寄せられました。

（広島市留学生会館）

留学生が書道体験ワークショップに参加

八月二十三日（金）の午後一時より、広島県立美術館において第六十五回毎日書道展中国展・書道体験ワークショップが開催されました。留学生会館から居住留学生が七人、また、ひろしま奨学金奨学生も一人参加しました。今年のテーマは「書の未来へ」。参加した留学生や小学生が、安田女子大学文学部書道学科の学生のみならず、未来や平和への思いとともに「書の心」を教わりました。

留学生・小学生それぞれ二人と講師役の書道学科の学生三、四人がグループとなり、示されたお手本を基に半紙や扇子に書を書きました。出身国・地域で書道を体験したことがある留学生も、初めて筆に触れる留学生も、目を輝かせながら日本の伝統文化を学びました。筆を使うことの難しさを実感しつつも、日本文化を通して国際交流を図る、とても良い機会となりました。最後に、書道学科の学生が二・四メートル四方の用紙に「翼」の文字を大書し、迫力あ



書を学ぶ留学生達

るパフォーマンスを見せてくれた。

この日の感想として、留学生から、「思い出に残る経験となりました」、「学業に専念しているとなかなか日本の伝統文化を学ぶ機会がなく、今日は貴重な体験ができました」などの声が、溢れんばかりの笑顔とともに聞けました。

また、ワークショップの様子を見学された市民の方からは、「留学生のみなさんは、自分が書いた文字について流暢な日本語で解説をされた」、「自己紹介では広島で何を勉強しているか説明するなど、とてもしっかりとした挨拶をされた」などの声が聞かれました。

（広島市留学生会館）



プロフィール
 (のぶもと まえこ)
 1948年(昭和23年)生まれ。現在65歳。家族は夫と3男で、現在は夫と2人暮らし。
 1985年～2013年まで“ぺあせろべ”の運営を補佐。
 医療法人社団 のぶもと歯科 事務長、(公財)広島平和文化センター理事、元広島カナダ協会事務局次長、Yes!キャンペーン代表、学校法人 比治山学園 比治山女子中学・高等学校同窓会会長、ジョイン広島会員。

《特集》国際交流フェスティバル “ぺあせろべ”
 30年の歴史に～FINAL～

人生を豊かにした
ボランティア活動

ぺあせろべ実行委員会アドバイザー

延本 眞栄子

ぺあせろべ

一九八四年十一月四日、平和と愛を旗印にした第一回の「ぺあせろべ」が広島市の中央公園芝生広場で十二団体の参加を得て開催されました。当時、中曽根内閣総理大臣の「アジアの留学生を日本へ」の留学生増員計画で広島市にも留学生が増え、広島街に外国人が増えてきました。外国人にどう接すればいいのかわからない日本人が自然に外国人と交流出来る場所として「ぺあせろべ」は始まりました。PEACE & LOVEをスベイン語風に発音して名付けられたこの祭りは、二〇一三年十月二十七日、三十回目の開催で交流の場所としての役割を終えたのです。

「ぺあせろべ」では参加団体が主役として参加団体が内容を決めます。私たち運営委員は参加団体の希望を叶えるために働くのが仕事です。だから形体は同じなのですが内容は毎年変わります。参加団体も四十から多い年で五十六団体の参加がありました。毎年少しずつ変わっています。同じ参加団体でも内容が違う時もあります。三十回のうち全く同じ祭りはありませんでした。だから三十年毎回新鮮な気持ちで続けられたと思います。

三十年間守り続けた約束は、テントは使う人が自分たちで立てるのが原則(とは言いきながら皆、助け合って準備・片付けしていました)、イデオ

ロギーは持ち込まない、業者の参加は認めない、締切を過ぎても参加希望はできるだけ受け取る、何事も柔軟に取り組む、といったことでしょうか。はじめの頃は留学生の参加が多くありましたが、広島大学が東広島市に移転してからは留学生の参加が少なくなってきました。その代わり、広島に住む外国人や草の根の二国間交流をしている団体の参加が増えてきました。「ぺあせろべ」の状況は広島街の変化を如実に表していました。



閉会セレモニー (メッセージと折り鶴の授与)

割を果たしているのか? このままでもいいのかしらと思うこともありました。そんな時、アジアの国を支援している団体の方から「ここでの収益があるから私たちの活動が続けられるんです」と聞いたときには嬉しかったです。交流の役に立っていると思えました。

日本文化で参加していただいたあの団体から、「ここで出会った外国人の方が習いに来ていて、本国に帰っては是非日本文化を紹介したいと言われ、アメリカ、ドイツに行ったんですよ」とお聞きしたこともありました。出会いの場所になっていたのです。ある方がマレーシアに行かれた時、広島に留学していた学生さんに会って「ぺあせろべ」は楽しかった。OB会をしたいですね。」と言っていましたよと聞いた時には、広島で良い思い出を作ってもらえたと思えました。そんな折に触れて聞かせていただくとお話が私の迷いを消してくれました。

私とボランティア

私はこれまで「ぺあせろべ」をはじめとしてボランティアを長くしてきましたが、「ボランティアをしよう」と思ったことは一度もありませんでした。誰かの為にこれをしようと思気込んでいませんでした。頼まれると断れない弱い私がいって、引き受ける時、私にできるかなと少しも考

えない馬鹿な私がいきました。どんなことでも、引き受けた事は自分に出るだけの努力をするのが私の motto なのです。一生懸命成就するよう頑張るのです。その繰り返しで三十年あまりを過ごしてきた結果、私は長いボランティア生活を送ってきたことになりました。若い頃に、留学生のために雨の中走り回りビショビショになって帰った私を見て、主人は「真女よくするね」と呆れた顔をしていました。それからは何も言わなくなりました。あきらめたのでしよう。

ボランティア活動は、私の人生を豊かにしてくれました。様々な人たちとの出会いがあり、学びがありました。学校では教えてくれなかった事、お金では決して買うことのできない大切なことを教えてくれた「ぺあせろべ」には感謝の気持ちで一杯です。世界のいろいろなところで自分の特技を活かしてボランティアをしている方々を見ると、もう少し勉強をしておけば、何か私も、もっと人の役にたてたのと思うこともあります。けれど人生に「もし」「あの時こうしておいたら」はありません。これから現状の中で、どんなことも先ず受け入れて、自分にできる事を一杯します。そのことが誰かの役に立つことになれば、これ以上嬉しいことはないと思っています。